

## 幼少期の錦州・奉天・引揚げと故郷再訪

高知大学名誉教授（満州の歴史を語り継ぐ高知の会、代表）

私は昭和 15(1940)年 11 月 29 日、満州・錦州の満鉄(南満州鉄道)社宅で生まれた。父が 29 歳、母は 26 歳の時であった。二人の故郷は箱根の麓の小田原である。私の生まれ育ったところを



見たく、2009 年に、中国留学生、高知大学大学院で指導した朱文栄氏と二人で、8 月 15 日終戦の日に錦州を再訪した。終戦日の体験をしたかった。両親から終戦の日は快晴で暑かったと聞かされて育った。私の満州の記憶は、その頃から始まる。5 歳になる前であった。

### 生まれた社宅の場所には高層ビル住宅

再訪の日も暑く快晴であった。錦州市街の並木道は緑に覆われ、高層ビルが林立し人出は多かった。駅舎は 10 階ほどの商店や食堂が入ったビルになっていた。錦州市は中国東北部(満州)の中核都市である。社宅団地は駅舎の隣で塀も昔のままのようであった。社宅は高層住宅ビルになっていたが、社宅内の道は昔の幅で配列も昔と同じように思えた。通路としては細かった。社宅前の樹々は大きく深い緑の並木道になっていた。

亡き父の回想録の地図から、私の家があった場所がわかった。社宅の後ろが高い土手になっており鉄道になっていた。記憶のなかに列車のガタコト、ガタコトの音があるが、こんなところに私が育った家があったことを知った。二歳上の姉から、「子供達は集まり、列車に日本兵が乗って居て屋根にソ連兵が座っている列車を待ち、子供達が手を振ると、兵隊さんが窓から手を振ってくれた」と聞いたことがあるが、兵隊さん達はシベリアへ送られた。「奉天からの引揚げの時に、列車から見た錦州の家は、そのままだったという母の話が、その時にわかった。

### 錦州の社宅生活



昭和 20 年 4 月に撮影した家族写真

錦州の社宅団地には 2 戸建ての家が並び、かなり広い敷地を占めていた。その周りには、高い塀で囲まれており、正門があった。その正門に大きなアカシアの木があり、白い花はやわらかく甘い香りがあり摘み取り、天ぷらにして食べたと言う。自宅の社宅の前庭にはいろいろな花が植えられていた。

社宅はペチカを中心に部屋が作られていた。その通風管の隙間が暖かく自家製の納豆を横に置いて作った。母は蓄音器を購入して童謡などを良く聞かせてくれた。帰国後小学校で音楽の時間に習う歌のなかには、同じ歌を蓄音機で聞いた記憶のものが多かった。

社宅内の銭湯に行くのが子供達の楽しみであった。終戦直前、夕暮れ前に姉と行き、帰り道に、防空壕が掘られたままの大きな穴場に落ちて、泥だらけになって家に帰ったそうだ。数戦前後に、大人達がバラ針金を塀に張る作業をみていた記憶がある。



家の近くに父が働いている鉄道局があった。この建物は、2009年錦州を訪問した時に、父の回想録の地図の同じ場所にレンガ造りの建物があつた。今は鉄道関係事務所になっていた。古い赤黄色のレンガの建物であつたので、昔の満鉄鉄道錦州総局のままの建物であろうと思った。

#### 満鉄錦州総局、現在も鉄道関係機関

その建物は社宅の正門から大きな道を隔てた斜め前にあり、社宅から子供でも歩いて行ける距離であつた。姉と私が手をつないで遊びに行ったそうである。建物の2階に父の部屋があつた。父は、窓から姉と手をつないで、やって来る私達を窓からみていた。父の部屋で電話遊びをしたという。ほかの人の電話から掛けたのだろう。父から私達が歩いて来るのがみえて、二人が、「手をつないだ姿がかわいらしかった」と、父は亡くなるまで何度も、このことを話していた。この頃は平穏な日々であつた。父は晩年に、「あの頃が、人生で一番楽しかった」とよく言った。



馬車で2時間ほどのところに干潟の広い葫蘆島海岸あり、休日に潮干狩りをしたりして遊んだ。波がない記憶があり、引揚げてきて小田原の海岸で波がある海をみて、これが海であることを知つた。葫蘆島は、後日、引揚船の港になり、そこから満州各地からの大部分の人々が帰国した。

2009年8月15日

#### 葫蘆島・前方の丘が、引揚船波止場がある港

錦州訪問をした時に「コロ島にゆきたい」と近くにいたひとに尋ねると、「今は軍港になっており、立ち入り禁止だ」と聞かされた。葫蘆島の丘は霞んでいた。葫蘆島海岸は、広い遠浅の砂浜海岸公園で賑わっていた。

父は会社の情報でソ連軍が満州の国境を超えて入って来たことを、終戦3日前に知つた。ソ連軍が錦州に来る前に、母と子供を日本に帰そうと切符の手配をした。切符の日付は8月15日夜行便であつた。その日が終戦の日である。高知出身の甫喜本さんが社宅におられ一緒にゆくことになった。耐久食としてドウナツを私の家でたくさん作った。しかし「終戦になつたので、列車は朝鮮まで行けない」と判断して朝鮮行きは中止した。「もし終戦が一日遅れたら朝鮮行きの列車に乗り、途中

で降ろされ、私達は多くの本に書かれている悲惨な朝鮮への逃避行をしたであろう」と両親は言っていた。

終戦になっても、錦州市にはソ連軍や中国軍の侵入はなく、日本人と満鉄スタッフの努力で、市街の治安を守り、暴動などは起こらず高い塀でかこまれた社宅区画内は平穏であった。終戦後中国人達が急に威張りだし、市内に野菜などの買出しに出る時は注意を払い、団体行動をしたそう。満鉄社員のなかには嫌がらせを受けた人達もあったようであるが、父は職場で中国人と親しくしていたので、中国人から、時々豚まんじゅうの差し入れなどがあった。多くの社員は仕事なくなり持ち金で過ごし10月まで戦前と変わらない日々が続いた。父は殖産部勤務で、満鉄倉庫の管理をしていて、倉庫には駐留日本軍隊用の物資が大量にあり社員に分配した。家には薬やブドウ糖(固形)などを持ち帰っていた。ブドウ糖が引揚船での弟の健康保持に役立った。しかし錦州市は交通の拠点であり、近く八路軍(共産党軍)と国民軍、それにソ連軍との戦場になると予想し、奉天に避難した方が良く社内でも決まり、奉天の住み場所は確保したと言われ、希望家族は特別列車を編成して奉天に向かった。

### 奉天(瀋陽)での生活

社宅を去る時には、我家には開拓団家族が三家族同居していた。母は「帰国したら連絡を下さい」と実家の住所を開拓団の三家族に書いて渡した。多くの食料(倉庫に米や缶詰)や衣類などを置いて、持てるものだけを背負って錦州駅を発った。錦州市での内戦は日本人の引揚げ後に起こったので、開拓団の家族は無事に帰国されただろう。しかし帰国後に開拓団の家族から何の連絡も届かなかったことを、母は気にしていた。この出来事は、母と開拓団の方との気持ちのすれ違いがあったと思っている。錦州社宅の人達は、多くの開拓団の人達を同居させていたようだ。

20年(1945)10月10日錦州から奉天へ、略奪を恐れて夜行列車で奉天へ避難した。途中、幾度か列車が停められたが、略奪に会うこともなく奉天に着いた。後日、一緒に奉天に行った甫喜本さんの小学生になっていた長男の宏さんに奉天のことをお聞きした時、奉天の駅で、手に持てるもの



を持って宿舎に行き、再度駅に戻ったら、残っていたものが、全部なくなっていたという。奉天では学校のような建物に2~3日間収容され、錦州の満鉄社員家族は、奉天在住社員の家に居候した。私達家族は満鉄の奉天駅と隣接する社宅に入るようになった。

#### ホテルの窓より

#### 奉天(瀋陽)の社宅団地。2階の棟

私達の落ち着いた家は、二階建ての家であり、駅の隣で上級社員の社宅であったと思う。最初、一階に住み、その部屋は使用人達の部屋だったようで、南京虫が多くて、二階の部屋に移させてもらった。ひとの良い方々で、帰国まで家主家族と私達家族で住み、何のトラブルもなく過ごした。二階にも部屋がいくつかあった。ベランダで

各家がつながっていてベランダで子供達は遊び、ベランダから隣の家に渡る綱渡り遊びをしていた記憶がある。

父は満鉄紹介で、ソ連軍が経営していた工場のボウラー炊きに雇われた。市街地にソ連兵士が徘徊しているので、郊外にあった工場まで、社宅からの行き帰りには、「ソ連軍許可雇員」と大きくロシア語書かれた腕章を付け隊列を組んで歩いたそう。帰りにはコークスを持ち帰り、ダルマストーブで燃やし、寒かった奉天の冬を暖かく過ごすことができた。甫喜本さんの家では本や新聞を燃やし、学校から壁板を剥いで燃料にしたと聞いた。奉天での記憶は、かなりはっきりとしている。あまり社宅内から市街に出なかったが、休日には父に連れられて市場に行き、手で細くしてゆく中華そばを食べ、「てんびん」と言って、薄い柔らかいせんべいのようなものに野菜や肉を包んだものを買ってもらった。

父の従弟が、徒歩で10分くらいの所の「煙草国策会社」の一戸建の社宅に住んでいた。二階建てで、一階はソ連軍将校宿舎として接収されて家族は二階に住んでいたが、将校と仲良く過ごしていた。一歳下の昭雄ちゃんがおり、父に姉と連れられて遊びに行った。美味しい菓子を買った記憶がある。途中は雪道で親子で遊んだ。

父は知人にロシア語を覚えてもらい、職場の日本人雇員の班長のような役をした。ソ連軍監督将校は、初めは白刃の日本刀を指揮棒にして警戒的態度であったが、父の片言のロシア語で、だんだんと穏やかになり、日本人雇員に好意を持ち、黒パンを配るなどした。父の収入もあり、高粱飯であったが、ひもじい思い出はなかった。

しかし、三歳の弟は慢性中耳炎で、毎日のように母が背負い満鉄病院に通った。市街にはソ連兵がマンドリン銃を持って徘徊しており、行き帰りの道でソ連兵に合わないよう注意し、怖かったそう。しかも弟は慢性下痢で、虚弱で錦州から持ってきたブドウ糖や薬で命が助かったと母から聞かされた。

社宅内は塀で囲まれ平穏であったが、毎晩のように郊外で交戦をしており、大砲の音の記憶がある。その頃、市街地では発疹チフスが蔓延し大勢の人が亡くなった。「市街外の焼き場では、毎日のように死体を焼く野火が上がっていた」と、母は奉天の話をした時に語った。

2009年、奉天(瀋陽)駅から錦州へは、行きは高速鉄道(新幹線)で南錦州駅に降りタクシーでトウモロコシの畑を走り錦州市内に入ったが、帰りは奉天逃避行をしたローカル線で、約6時間かけて奉天駅へ向かった。車窓から遠くまで広がるトウモロコシや高粱の畑を眺めた。高粱の実には茎のてっぺんに付くと朱さんから聞かされた。この風景は昔のままであろう。瀋陽駅舎は昔のままで、その屋根の上に丸い夕陽をみることができ、「これが満州の真っ赤な夕陽だ！」と写真を撮った。駅の近くの路地では中華そば、てんびん、焼き芋などの屋台があり賑わっていた。「子供の時、これらとみていたのかな」と思った。

瀋陽市街は、多くの高いレンガ建築が残っていた。内装は清潔感がありリニューアルされていたのが、強く印象に残った。特に駅前に4階ほどの高い建物が並んでおり、ヤマトホテル、母が通った満鉄病院もそのままであった。レンガ造りの満鉄病院には研究所と書かれた看板があり、後の高層ビルは、病院だろうと朱さんは言った。

昭和 20 年から 21 年の厳しい寒さの冬を、家族が無事に過ごせたのは、奉天在住の日本人グループの協力と、居候した家主の家族が親切に私達の家族を見守って下さったことである。病弱の三歳の弟、やんちゃな姉弟は、うるさい存在だったと思うが、両親は、家主さんから小言を言われることはなかったという。

## 21 年(1946) 8 月 26 日 奉天より引揚げ

当初帰国の日が決まっていたが、私と弟がじゃれあいをしていて、弟のペニスを噛んでしまった。それが治るまで。と言うことで帰国が遅れてしまった。錦州から一緒に奉天に避難した満鉄社員家族のほとんどは、第一陣引揚げで帰国してしまったので、2か月ほど寂しい思いで、すごしたと父が話したことがあった。

引揚げのことは、両親から聞いていたことを基に綴る。昭和 21 年 8 月 26 日朝に、引揚げの連絡が突然あった。隣組から「午後 2 時まで朝日広場に集合」という連絡であり、時計をみたら 11 時であった。母は洗濯仕事をそのままに、急いで持ってゆく、おにぎりのご飯を炊きだした。家を出る時に、二階に洗濯ものが、干したままであったのを見たという慌てぶりであった。

帰国の用意はしていたが、慌ただしい引揚げの途であった。父は布団袋を手造りで大きなリュックサックにした。子供達も大きなリュックを背負った。今まで使っていたものを全部そのまま残し、リュックサックに入れられるものだけ持って、近所の人と連れだって朝日広場に行った。広場に着いたら、もう大勢集まっていた。馬車が来てそれぞれの組みに分けて、ひとも荷物も一緒に、奉天の駅に向かった。奉天駅に着いた途端に夕立があり、雨のなかで立たされた。

暗くなつてやっと貨車に乗った。屋根のない貨車のなかで、再び雨に合い、皆、何もかもが、ずぶ濡れになった。弟は母にしがみついていた。ひどい雨で、雷のゴロ・ゴロという音を姉は記憶している。

朝方になると雨が止み、星がでてきた。夜明けの頃、懐かしい錦州市街に入った。貨車から見る市街地は、出て行った時と全く変わらず、錦州の社宅は線路沿いにあり、我が家は、そのままのたたずまいで、母は「何で奉天に行ったのだらうと思った」と言った。しかし錦州を再訪した時、錦州駅の裏にある{錦州戦争博物館}の正面に大きな「錦州の攻防戦」の壁画があった。錦州市街は 1948 年 9 月に国民軍と八路軍(共産党軍)との攻防の激戦場となった。壁画では、街は無残に破壊されているが、錦州駅と満鉄社宅付近は、戦場のなかの孤島のように無傷に残ったことが描かれていた。戦略的に鉄道機能を残し、満鉄官舎は勝ち組の拠点住居として残したと書かれていた。この時、再訪で社宅団地とその周辺が昔のままであったことが理解できた。

私達は錦州駅で降ろされ、元日本軍兵舎の収容所に入れられた。牢屋のような収容所に 1 週間ほど居て、9 月 3 日錦州駅から再び貨車に乗せられて葫蘆島駅に着いた。葫蘆島駅から波頭までは遠かった。暑い炎天に照らされて、水筒の水しかなく、喉が乾いて辛かったことを忘れることができない。葫蘆島の波頭で荷物の検査があった。1 日、何も食べていないので、くたくたになり、私はリュックが持ちあがらなくなってしまう、父に助けられて重いリュックを泣き泣き背負い、歩いた。そこから大きな米軍の貨物船、8000 トンあまりのリパテー号に乗船した。長いタラップを登った



記憶がよみがえる。

船のなかには、約 5000 人の人で、身動きさえできないくらいであった。皆、大人も子供もむしろの上に毛布を敷いて疲れて寝ていた。母が、船の炊事場に水を貰いに行ったら、「水がほしいなら海の水を飲め」と、日本人乗組員に言われて、悔しかったと言う。

船のなかに 1 週間ほどいた。1 日に、高粱のご飯 1 杯、芋の軸が入った味噌汁 1 杯とお湯が 1 杯で、皆空腹に耐えた。弟は、何も食べなくなって泣くばかりであった。錦州から持ってきたブドウ糖と薬と飲ませていた。「もう少し、船での生活が長かったら、弟の命は危なかったかもしれない」と、母は晩年まで言っていた。多くの引揚船の船内で亡くなる者が出た。幸い私達が乗船の船で死者は出なかった。甲板に出て海をみると、船が半分沈んでいた記憶がある。

9 月 11 日博多港に着いた。港に着いてから船内に病人がいる事で、3 日間ほど沖に停泊し、ひとり、ひとり検査をした。海のなかにたくさん魚がいて、大人達は釣竿がないので、糸をつるして魚を捕っていた。私達子供は甲板を走り廻って遊んだ。下船の夜は、甲板で盛大な演芸会が行われたことを鮮明に覚えている。

下船すると、タラップの下で、真っ白な粉を頭から吹きかけられた。DDT の粉末である。岸壁にいた婦人会の人たちが船のそばに寄ってきて「ご苦労様」と言って迎えてくれ、“おにぎり”をもらった。その時の嬉しかったことを母は語った。大人も私達子供も、皆泣いていた。それから松林を歩いて収容所に入り 4 日間ほどいろいろの手続きがあった。収容所までかなり長時間、松林の中を歩いた記憶があり、後年、その場所を探して歩いたが分らなかった。多分宅地になったのだろう。手続きが終わった者から、各地へ出発する引揚列車に乗った。

列車は引揚者専用の列車ではなかったと思う。よく停車した。多くの者が車内通路に寝ていた。私には椅子に座った記憶がない。母は「どの街も焼け野原で、ひどいショックを受けた」と幾度も話した。

私は、なぜか 8 月 15 日の終戦の日のことを記憶している。一年後の引揚の 2 週間くらいの行動も、かなり鮮明に記憶がよみがえる。人は斑点のように記憶するのだろう。

私は「満鉄」という比較的恵まれた生活環境のなかで、戦後の激動期を錦州と奉天で過ごした。戦後の一年間、奉天市街は、疫病と横暴なソ連軍兵士達で、無秩序な街になっていたことを、後日知った。私には悲惨な記憶はないが、父から「工場に郊外の往く路で、夜間市街戦の死体兵士を見た」、母から「火葬場から煙が絶えなかった」と聞く。このようなことはあってはならない。

私は小学校の時の 2 年生から 4 年生まで、増田昭一先生が担任であった。まだ多くの人が国民服を着ていた時代で、先生は学生服かなと思っていたが、後日お会いした時に、着てゆく服がなく友達から兵学校の服をもらって着ていたと聞いた。4 年生の時の写真では背広になっていた。増田先生の黒板の字は大きな字で書き、声も大きかった。後日談で、先生は満州では医学生であったが、帰国して職がなく新米教師になったという。授業の合間には、声を落として、新京の難民避難収容所で、悲惨に亡くなって逝った子供たちの話をされた。

私は真剣にその話を聞いていたが、あまりにもかわいそうで、「私も満州にいました」とは言えなかった。しかし、長く先生のお話しは胸の中から消えなかった。60 年後に小田原の同級生から、増



小学校2年生。海軍兵学校服で増田昭一先生、筆者は右2列の2人目

田先生の書いた本をもとに、TBSの終戦記念ドラマで「遠い約束」が放映されることを知らされた。テレビドラマを視聴して感動し、先生にお会いしたくなり、3人の同級生とご自宅に訪問した。増田先生の数奇な人生を描きたくなり、幾度も先生に聴き取りをして「大地の伝言」(夢工房)を刊行し、高知で満州の歴史を語り継ぐ高知の会を発足することになった